



ウィスキーと文化

ステファン・ブッヘンベルゲル（非文字資料研究センター 研究員）

非文字の文物と言え、まず絵、彫刻、神器などが思い浮かぶ。これらは人間の手でつくられた事物であるが、単なる実用品以上の価値があり、人間文化の発展を象徴し記録している。

さらに日常の用を足すための服、家具、乗り物、住居なども人間文化の発展を記録する。これらの事物はみな、目的に資するのみならず、常に、文化が展開する過程の一部でもあるからである。人類の発展は、文章や絵画によって記録され、同時に、例えば農具の変遷などによってもそれを跡付けることができるのである。

非文字文物の展開によって人類の文明を描く、実に革新的な試みが、トム・スタンデージの *A History of the World in Six Glasses*（原著 2006 年、新井崇嗣訳『世界を変えた 6 つの飲み物』2007 年インターシフト社）である。この本で著者は、世界史を 6 つの飲み物を通じて描いている。ビール、葡萄酒、茶、コーヒー、蒸留酒、ソフトドリンクである。これらの飲み物はすべて、歴史のゆくえの決定に関与してきたことから、非文字文化の卓越した例でもある。とりわけ私の研究上の関心は蒸留酒のなかのひとつの飲料に向けられている。ウィスキーである。そしてその歴史、その文化的記憶の担い手としての役割、その非文字文物としての側面である。

研究上とりわけ魅力的なのが、アメリカ英語の “Whiskey” ではなくて “Whisky”、つまりウィスキーのなかでもスコットランド製のものである。その理由は、長い伝統を有するからである。「スコットランド人はケチである」という典型と並んで良く知られているスコットランド文化の特徴の一つである。

ウィスキー好きにとっては、ウィスキーはシングルモルトに限る。100 パーセント大麦の麦芽でつくった「命の水」だ。

ウィスキーは飲んで純粋に楽しいうえに、既述のように文化的記憶の一部でもある。ウィスキーは、スコットランドの高地や、ロマンティックに美化された密造の光

景、密輸入、冷酷な税吏、時にはスコットランドの国民的作家ロバート・バーンズさえ想起させるのである。特筆されるのは、滅んだ酒蔵のウィスキーが、失われた文化の代表となっていることである。

ウィスキーはとりわけ近年のブームのおかげでさまざまな文化活動の中心にもなっている。アイラ島のウィスキー・フェスティバル “Feis Ile” がその例である。毎年何千人もがスコットランド西部のこの小さな島を訪れ、酒蔵見学やウィスキー祭記念酒と、ウィスキーとは特に関係ない音楽、踊り、民謡を組み合わせたフェスティバルを楽しむのである。

ウィスキー自体のほか、瓶、グラス、樽、蒸留釜など、ウィスキーに関わるさまざまな文物が、歴史、とりわけスコットランドやヨーロッパの工業史を垣間見させてくれる。これを非常に自覚しているウィスキー産業も、おのれの歴史と伝統を強調する。ドイツの酒蔵 “Whisky Agency”（ウィスキー・エージェンシー）の “Liquid Library”（リキッド・ライブラリー）というシリーズが一例である。シリーズの名称が、私の研究上の関心をかなりよく表している。液体の図書館が保存するのは、記録された文字ではなく、非文字の文物なのだ。

アイラの伝統ある酒蔵 “Ardbeg”（アードベッグ）は、



図 1 Ardbeg（アードベッグ）社から限定発売されたウィスキー “GALILEO”

近代天文学の父、ガリレオにちなんで、“GALILEO”（ガリレオ）と名付けられたウィスキーを限定発売した。

これは、国際宇宙ステーション（ISS）が、無重力状態がウィスキーの分子にどのように影響するのかという実験を行うことを記念して発売されたものである。

スペインの酒蔵“Glenfarclas”（グレンファークラス）は、1865 年以来家族経営であるが、“The Family-Casks”（家族樽）というシリーズでこの伝統を強調している。伝統は、古典的なラベルや、古典的な瓶の形からも見てとれる。

ウィスキーと文化との関連について私はすでに論文「ウィスキーと文化」（神奈川大学人文学研究所『人文学研究所報』48 号 35-47 頁）を公にした。引き続きこの研究を進めたい。



図2 Glenfarclas（グレンファークラス）社の“The Family-Casks”（家族樽）シリーズ

渡辺美季先生が伊波普猷賞を受賞

本センター研究員の渡辺美季先生が、2013 年 2 月 12 日に、優れた沖縄研究に贈られる第 40 回伊波普猷賞（沖縄タイムス社）を受賞されました。受賞業績は、『近世琉球と中日関係』（吉川弘文館、2012 年）です。

渡辺先生は、新進気鋭の歴史研究者で、東洋史に軸足を置きつつ近世琉球を中心とした東アジア国際交流史の研究を続けてこられました。その論考をまとめて博士論文を作成し、さらにそれを基にして受賞著書が発刊されています。

従来の琉球・沖縄史の研究は、どうしても日本史の視点から研究が進められてきました。一つは、近代以降、沖縄は日本の一部であるという領域の問題が強い影響を与えていたと思われます。近世の琉球は、薩摩の侵略以来、日本の幕藩体制に深く組み込まれていきます。その点から、琉日関係を日本の対外政策の一環として研究したり、琉球社会を幕藩体制との関連で研究する立場が支配的でした。

他方、従来通りに中国とは冊封朝貢関係を維持し、近世琉球は中日両属の関係にありました。中国と琉球は、日本の鎖国時代にあっても密接な関係をもっ

ていました。中国史の立場からは、中国の外交政策の一部としての琉球としか対象にされませんでした。

渡辺先生は、琉球の資料を扱うだけでなく、中国の資料を丹念に調べることによって、新たなテーマを掘り起しただけでなく、明清と日本の間にあって、双方の支配秩序の違いの中でそれを調整しつつ存在した琉球を、「狭間」という独自の概念でその国際関係を把握しようとした点が、大きく評価されたのではないかと思います。（小熊）

